

「浩平！前っ！」「ああ」

ばきっ！

「ぬよやよわあふや～」

俺は意味不明の叫びをあげた。な、何か顔が痛い。何があったんだ!? 気がつく俺は電柱に求愛しているような姿勢だ。な、なに、誰かがこの電柱を俺の進路の真正面に持ってきたんだな！誰だ誰だ。俺がきよとんとしてると、瑞佳が

「何考えてたの？」

とたずねてきた。

「いや、別に。ただボーっとしてただけだ」

…俺の頭の中では今朝のことがずっとひっかかっていたのだ。この違和感。これは一体何なのだろう。一体何が起ころうとしているのだろう。…一体…。そんなことを考えながら歩いていたのだ。

「浩平、気をつけようよねえ」「ああ」「『ああ』以外の返事をしようよお」「ああ」「浩平っ！」「冗談だって」

ドンッ！

瑞佳と漫才みたいなことをしていたら誰かにぶつかってしまった。誰かと想って見ると、七瀬らしい。

「あ、おっはよ、瑞佳」「七瀬さん、おはよう」

七瀬と瑞佳はこんな日常的な会話を交わした。…だが。七瀬が俺を見る視線に怪訝さが混じっている。瑞佳と俺を交互に見比べている。まるで、「こいつ、誰？」と言っているような感じだ。…七瀬はしばらく考えていたが、

「私、先に行く」

とだけ言い残して先に行った。なんだろう。どうなっているのだろう。今朝は秋子さんに俺の存在を忘れられたような感じだった。そして、今は、七瀬にまるで忘れ去られたような…。一体どうなってるんだ…。

教室に入って模擬試験を受けるときも、自分の席はちゃんとあった。だが、担任も俺のことを不思議そうな目で見ている。クラスのほとんどの奴も俺のことを怪訝な顔で見ている。

本当に、何がどうなってしまったのかわからない。いつも授業が終わると必ず話しかけてくる北川や七瀬も模擬試験が終わったときには話しかけてこなかった。誰にも声をかけられなかった。瑞佳を除いては。

瑞佳と一緒に学校から帰る。途中で出会う人も、誰もが俺の存在を知らない。俺が存在しているこの世界は一体どうなってしまったのだろう。

赤い夕日を見上げて考えながら歩いた。

まるで、空にこのままおちていってしまいそうな感覚がする。そして…。夢。夢を見ている。そんな感覚だった。

そして…ボクはまたこんな場所にいる。

うあーん！うあーん！うあーん！うあーん！

泣き声が聞こえる。

誰のだ…？

ボクじゃない…。

そう、いつものとおり、あゆの奴だ。

「うあーん！うあーん！うあーん！」「どうしたの、あゆ」「うぐう。お兄ちゃんが、たたいたあーん！」「浩平、あんた、またっ！なにしたのよっ！」「ちがうよ、遊んでただけだよ。猪木の気合入れごっこして遊んでいただけだよ」「そんなのごっこ、なんて言わないのっ！あんた前は、60文キックごっこか言って、泣かしたばかりじゃないのっ」「ごっこだよ。本当の60文キックや猪木の気合入れは真似できないくらい効くんだよ？」「ばかな理屈こねてないで、謝りなさい、あゆに」「うあーん！」「うー…あゆお…ごめん」「ぐすっ…うん、わかった…」「よし、いい子だな、あゆは」「浩平、あんたが言わないのっ！」

実際あゆが泣き止むのが早いのは、別に性分からじゃないと思う。ボクが本当のところ、あゆにとっては、いい兄でありつづけていたからだろう。そう思いたい。母子家庭であったから、あゆはずっと父さんの存在を知らなかった。ボクだってまるで影絵のようにぼんやりとした覚えてはいない。動いてはいるのだけど、顔は全然はっきりとしない。どんな顔をしていたのか、全然思い出せない。そんなんだから、あゆには、男がどのようなものなのかということも教えてあげたいと思っていた。だから、父親参観日には、あゆのためにも変装して出席してやろうと思っていた。みんなに、あゆにさえ、バカにされたけど、でも、構わない。ボクができるだけのことをあゆにやってやりたかった。あゆの笑顔を見たかった。だから、他のひとに笑われる、ということも怖くなかった。

「あゆ、絶対父親参観日にボクが行ってやるからなっ」「ええ、お兄ちゃん無理だよ」「大丈夫だ。お兄ちゃんを信じろ！おおふなにのったつもりでまってる」「おにいちゃん、おおふなじゃなくておおぶねだよ」「フランス語で言ったらそうなるかもしれないな。まあ、だいじょうぶさ。なんとかしてみせるよ」「うん、がんばってね！」

ところが、ある冬の日のこと…。そろそろ変装道具を準備しなくてはいけない、と思い始めた頃だった。あゆは、木の上から落ちて頭を強く打ってしまった。そして…何も話さなくなってしまう。目を覚ますことすらなかった…。だけど、みんな、あゆは病気で眠っているだけでももうすぐ目を覚ます、とばかり言っていた…。

「バカだな、おまえ。こんなときに病気になるって」「……………」

あゆの邪魔そうな前髪を書き上げてやりながら窓の外に目をやると、自然の多く残る町の風景が見渡せた。そして、秋が終わろうとしていた。

「あゆお〜」「……………」「あゆ、退屈してると思ってな」「……………」「本を読んでやろうか？…こんな文字ばかりのものが面白いわけないな。だったらまんがをよんでやろうか？」「……………」「じゃ、オセロをやろうじゃないか」

ボクは借りてきた碁盤と碁石を、あゆに握らせた。

「何なの、これ？」、とあゆが言っているような気がした。

「わからないか？碁盤と碁石と呼ばれるものだ。専門用語ではな」「……………」「これでオセロをするんだ。ごぼんって、オセロをするためのものじゃないけど、気合があればなんとかなるっ！」「……………」

……………

しかし、話に聞いていたのとは違って、あゆの病院生活はいつまでも終わりそうになかった。あゆは大きな手術をして、あゆの体があゆの体じゃなくなってしまったみたいだ。そして、この時期から母さんも病院でない別の場所に入り浸るようになっていった。どこかはわからない。だけど、時々現れてはボクたちが理解できないようなわけのわからないことを言って、満足したように帰っていく。「せっぽう」とか言っていた。どんなものなのかは全然わからないけれど…。だけど、ぐるがどうかした、救済がどうこう、ということを書いていた…。なんだったんだろう…。

「わ、病室まちがえたっ！」「……………」「…あれ…でも…あゆか？」「……………」

あゆは、髪の毛がなくなってお寺のお坊さんみたいになっていた。

「びっくりしたぞ、お兄さんは」「……………」

ただでさえ、ここのところやせ細ってきているというのに、さらに髪がなくなってしまうものなら、ボクだって見間違えたような気がしてしまう。それくらい、あゆの姿は変わってしまっていた。

だけど、ボクはあゆに「苦しいか」と聞くことはしなかった。あゆは寝ているから返事をしないだろうとは思っていたけれど、もし起きている時に聞けば、あゆは絶対に、「そんなことないよ」というに決まっていた。気を使わせたくはなかった。だから、聞かなかった。本当に苦しかったり、辛かったりしたら、自分から言い出すだろう。そのときに、そばにいて、なぐさめてやればいだろう。元気づけてあげればいだろう。そう思っていた。

年が明け、正月もあゆは病室で過ごしていた。ボクも、こんなに静かな正月を送ったのは生まれてはじめてだった。

「あゆの今年の願い事はなんだ？」「……………」「もちろん元気になることだよな。それで、お兄ちゃんがきてくれる、父親参観をすることな。去年は無理だったもんな」「……………」

時間はあの時からとまっていた。準備をはじめていた変装道具も、そのままに部屋においてある。何か、変わったことがあるといえば、あゆの病気だけだという気がする。

正月が終わり、街並みが元通りの様子に戻って行く。だけど、あゆの過ごす部屋と病気の状態だけは変わっているようには思えなかった。

「あゆー」「……………」「また、手術するって聞いて、きたんだよ。大丈夫かい？」「……………」

だけど、あゆはやはり目を覚まさなかった。怖いくらいに静まり返る室内。部屋の中には、あゆの体にもつながっている機械が立てる音だけしかない…。

「……………」「あゆー」

……………。

「…あゆ？」

……………。

「あゆっ！」

……………。

「あゆーっ！あゆーっ！」「……………」「おやすみ……………」

月がまた変わった。でも、やっぱりボクたちは、なんにも変わらないでいた。あゆは誕生日を迎え、病室でささやかな誕生日会をした。でも、あゆ以外にはボク一人しかいなくて、ボク一人が歌を歌って、そして、ボク一人がケーキを食べただけだった。あゆは、やっぱり目を覚まそうとはしなかった…。

……………。……………。「……………」「……………」「今日をちちおや参観日にしようよ、あゆ」「……………」「今日にしよう……………」「……………」

ボクは大急ぎで家に戻って、変装道具を取ってからそれを抱えて病院へと戻った。そして、病院の廊下でボクはそれを身につけて、変装をした。スーツを着て、ネクタイを締めて、そして厚底の靴をはいた。そして、マジックで髭を書いて、そして変装を完了、ということにした。甲高い靴音をたてながらあゆの部屋に向かう。ドアの前に立ち、そしてノックをする。ノックより靴音のほうがよく響いていたと思う。

「あゆー」

ドアを開けて中に入る。

……………。

「あゆーっ」

……………。

「…あゆーっ？」「……………」

あゆは相変わらず眠ったままだった。だけど、息が何か苦しそうだった。だけど、あゆが苦しい、辛いと言い出さない限りは、ボクも平静を装うことにしていた。

「じゃ、おとうさんがみてやるからなっ」

ボクは壁を背にしてたち、ベッドに身を横たえているあゆを見つめた。ただ、あゆの様子を眺めているだけだ。それしかできない。

「……………」

……………。

「……………」

……………。

「……………」 「あゆっ？」 「……………」

……………。

「うー…ふう…ほうっ…」

苦しげな息が断続的にもれる。ボクはそんなあゆの苦しげな姿をただ見つめていることしかできなかった。

「はあっ…あうううっ…」

なんてことだろう。こんなに妹が苦しんでいる時に、ボクがしていることは、一番妹から離れた場所で、ただ単に突っ立ってみているだけだなんて。

……………。

「はああああっ…あうううっ…」

……………。

そして、ついに、あゆの口から…

「はああああうううっ…くるしいっ…くるしいよお、おにいちゃんっ…」

だから、ボクは走った。変な靴をはいているから転んでしまったけど、とにかくあゆの元にかけた。あゆは今になってやっと目が醒めたんだ。

「あゆ、だいじょうぶだぞ。お兄ちゃんがそばにいてやるからな」「いたいよ、おにいちゃんっ…いたいよおっ…」 「だいじょうぶだぞ…。ほら、おにいちゃんがそばにいてやるから」「はあああっ…あうううっ…お、おにいちゃん…」 「どうしたんだ？お兄ちゃんはこちらにいるぞ」「うんっ…ありがとう…、おにいちゃん……」

…だけど。……………。

ボクはあゆにとっていい兄でありつづけたと思っていた。そう思いたかった。そして、最後の言葉は、そのことに対する感謝だと思いたかった。

あゆの葬式は、一日中しとしと降りしきる雨の中で行われた。すべての音や感情でさえも、かき消されてしまったような、そんな静かな葬式だった。冷めた目であゆの収まる棺を見ていた。母さんは最後まで姿をみせなかった。ボクはひとりになってしまったことを痛みとしてひしひしと感じていた。

そして、ボクしかいない家の中で、誰もいなくなったあゆの部屋をみたときに、ボク目からせきを切ったようにして涙がこぼれだした。こんなに悲しいことが待っているなんて知らずにボクは生きていた。ずっとあゆと一緒にい

られると思っていた…。ずっと、あゆがボクのことをお兄ちゃん、と呼んでいて、あゆの笑顔を見て幸せな気持ちになれることなんてなくなってしまったんだ…。すべては失われて行くものなんだ…。そして失ってしまった時に、こんなにも悲しい思いをする。まるで、悲しむために生きているように思えた。悲しむために生きるくらいなら、この場所に留まっていたい。ずっとあゆと一緒にいた場所にいたい。

……………

うあーん！うあー—————ん！

泣き声が聞こえる。

誰のだ…？

ボクじゃない…。

そう、いつものとおり、あゆの奴だ。

「うあああああーん」「うー…ごめんな、あゆ」「うぐう…うん。わかった……」

よしよし、と頭をなでてやる。

「いい子だな、あゆは」「うんっ」

ボクはそんな幸せだった時にずっといたい。ただそれだけだ…。

あの日から、ボクは泣くことが多くなった。泣いていない時間を探しては生活をしている、そんな感じだった。ボクはあゆと過ごした町を離れ、叔母さんの秋子さんのところへとあずけられていた。それでも、ボクが泣き止むことはなかった。どれだけ泣きつづけても、涙が出てくる。本当に不思議だった。

「泣いてるの？」

その町で、最初に泣いているボクを見つけたのがその女の子だった。そして、どんなときも泣いている時には、隣に彼女がいた。

「いつになったら、あそべるのかな」

毎日のように泣き伏すボクを見つけては、話しかけてくる。ボクは泣くこと以外には何もしなかった。もう空っぽの抜け殻のような感じだった。それなのに、彼女はボクの側にいつづけた。そして話しつづけた。いったい、その子が何を待っているのか、ボクにはわからなかった。

「…君は何を待っているの？」

それがボクが彼女にかけた最初の言葉だった。

「君が泣き止むのを待ってるの。いっしょに遊びたいから」「ボクは泣き止まないよ。ずっと泣きつづけて生きるんだ」「どうして…？」「悲しいことがあったんだ…ずっと続くと思っていたんだ…。楽しい日々が…。でも、永遠なんてなかったんだ…」

そんな思いが言葉で伝わるとは思わなかった。でも、彼女は言った。

「永遠はあるよ」

そして、ボクの頬は、その女の子の手の中にあった。

「ずっと、わたしが一緒に居てあげるよ、これからは」

そう言って、ちよんとボクの口にその女の子は口を当てた。

永遠の盟約。永遠を手に入れる盟約だ。

ボクはいろいろな人と出会って、いろいろな日々に生きた。ボクはあれから強くなったし、泣いてばかりじゃなくなった。ボクは盟約が動き出してから消えてなくなるまで、それに抗うようにしていろいろな人と、いろいろな女の子と出会った。ボクは幸せだった。

「滅びに向かって進んでいるのに…？」

いや、だからこそ、幸せなんだよ。滅びに向かうからこそ、全てがかけがえのない瞬間だってことを。こんな永遠なんて、もういらなかった。だからこそ、ボクは絆をもとめたはずだったんだ…。俺は。

だから、突然、瑞佳の名前を叫んだ。喉がからからに乾いていた。

「瑞佳っ!」「……………」「瑞佳っ!瑞佳ッ!」「…………浩平、どうしたの？」

違和感とはそれだったんだ…。

「なに怖い顔してるんだよ」

取り繕ったような笑顔で俺を見る。そして、どこに行こうとしているのだろう。俺は…。それは確実な「予感」だった。この場所を去って、どこに向かうとしているのだろう。この空だ…。向かえる場所もなく、訪れる時間もない。

…永遠。その言葉でつながっていたんだ。この空の向こうにその永遠の場所がある。あの日求めた世界だ。世界は永遠の盟約を交わした、あの時から始まって、そして、そこへ収束しようとしている。そこへ俺は向かおうとしているんだ。

家に辿り着いたので台所へ行ってみた。秋子さんはまだ帰っていないらしい。いつものように夕食を一人で食べる。そして、今日は疲れ切ったからとすぐに寝る事にした。

[2月14日・月曜日]

「浩平～、ちゃんと食事をちょっとは食べるんだよ～」

声をかけられ、頭を整えながら食卓を見る。朝食がなかった。一度だけならまだしも、二日も続けて。流しを見ると、一人分の食器だけがつけおきしてある。それは間違いなく秋子さんのものだった。彼女は、自分の分の朝食を食べ、そして出かけていったらしい。もしかしたら、何か、彼女が勘違いをしていただけなのかもしれない。だが最近明子さんには出会っていないし、この日常の繰り返しに変化が起きるほうがおかしい。

……。

一度会って話せばいいだろう。会って話して、どうして朝食を作ってくれな

くなつたのか聞けばいい。案外簡単な理由かもしれない。そろそろ自立しなくては行けない、とか…。秋子さんならあり得る話だ。だけど、それならそれで、書置きの一つくらいはあってもよさそうなものなのだが…。

………。

「ほら、浩平～っ！時間ないよ～っ！」

再び瑞佳の声。

「ああ、今すぐ行くって」

自分が急速に消え行く感覚。それはまるで、遠い昔に描いた夢のようだった。ずっと昔。それは幼い日の戯れだ。

「望んだ世界が生まれていたとして、そうしたら、どうなると思う？」

俺は唐突に話を切り出した。

「望んだ世界…？」「そう。例えばこうだ」「小さい時にお菓子の国のお姫様になりたいと強く思っていた女の子がいたんだ」「あ、私がそう。そんなこと思っていたよ」「時がたって、本当にお菓子の国はその子の強い願望によって生まれていたんだ」「そんなことあるわけないよ」「あったとしたらだよ」「あ、うん…」「すると、どうなると思う？」「女の子は選ぶんだろうねえ。その国に移り住むのか、あるいはここに残るのか」

選択肢なんてあるのだろうか。違う。この物語には第三者が居たはずだ。

「王子様がいるんだ、その国には」「うん」「盟約を交わしていたんだよ。一緒に暮らす、っていう」「うん」「条件が変わった。すると、どうなると思う？」「うーん、そうすると、その国に強制的に連れて行かれるんじゃないかなあ」「すると、俺は…いや、その女の子は、この世界ではどうなると思う？」「いなくなるんだよ」

俺はその瞬間、薄ら寒さを覚えた。すると、俺は今から、この世界から消えてなくなろうとしているのか…？そんな子供の戯言のようなおぼつかない口約束が、現実に俺のこの世界での存在を危うくしているとも言うのだろうか…？まさか…。しかし、実際に俺はその過程上にいるように思える。秋子さんにはどうやら忘れ去られているらしい。瑞佳にさえ、俺の存在の記憶をあいまいにされつつある。本当に俺はあの遠い空の向こうへと旅立ってしまうのだろうか？

…。……。………。

「浩平」

と瑞佳が立ち止まる。突然立ち止まって何のつもりなのだろう。靴紐でも解けたのだろうか。しかし、時間の余裕がさほどあるわけでもない。気にせず歩き続ける。そうしていると、後ろからと瑞佳が駆けてきて、そして俺に袋を手渡した。きれいにラッピングされた袋だ。

「今日はバレンタインデーだからね。あげるよ」「ありがとう…」「いつにな

く正直だね、浩平」「瑞佳…俺のことを大事に思っていてくれよ」「そんなこと
言われなくたってわかっているよ」

だけど、そんな現実が、揺るぎつつある。過去の盟約が現実のものとなろう
としている…。その事実だけが遠く視界の先にあった。

[2月15日・火曜日]

「また浩平のせいで遅刻だよ～っ!」「だからお前がもっと早く起こせばい
いんだ」「もーっ、面倒見きれないよーっ」「バカもん、先の先を呼んで行動し
ろっていつも…」「あ、浩平、前っ!」

ズドーーーーーン!

また、校門に激突してしまった。

だけど、校門をくぐっていく人は、俺、折原浩平だともきがつかずに、誰か
妙な人が居るとしか誰も思っていないようだった。

そして、自分のことを徐々に忘れつつある生徒がたくさんいる校内へ、校門
をくぐるのがためらわれた。

「何やってるんだよ、浩平! さっさと行くよ」

そうって、瑞佳は駆けて行く。

「あ、ああ…」

俺はそうつぶやいた…が、瑞佳のあとを追う気持ちにはなれなかった。

俺が消えるまでの時間はもうほとんど残されていない。自分が消える瞬間を
他の人に感じさせるなんてことは俺にはできなかった。その場にいた人に限り
ない苦痛を与えることになるのだから。

胸を張っていけばいい。俺は幸せだったんだから。

人との会話から始まって、約束を交わして、再会をして、お互いを知り、他
人でなくなり、互いが互いを干渉し、生活が少しずつ変わっていく…それは幾
度となく繰り返されてきた日常のはずだ。…はずなのに。空を見上げる。今に
もそこへ落ちて行きそうだった。本当に落ちて行きそうな感覚だ。俺は知っ
ている。その世界が本当に存在して、ただ悔恨の中に生きていくこれからの自
分を。

……。 ………。 ……………。

そして…俺、「折原浩平」が存在していた世界は崩壊した。一体、俺はこの
先どうなってしまうのだろう…。もし、奇跡が起こるとすれば、人との絆がど
れほど強かったか。これにかかっているのだろう……。だが、俺が存在して
いた『世界』が崩壊してしまった今、俺との絆を大事にしてくれている人はい
るのだろうか。強く想っていてくれる人はいるのだろうか……。

月曜日

この日はいつもと変わらぬ一日だった。ただひとつの点を除いては。いつもの学校の帰り道、僕はいつもと同じ道を一人で歩いていたが、目の前を歩いている人が一瞬消えたような気がした。だが、次の瞬間にはまた普通に歩いていた。もちろん僕はただの目の錯覚だと思い、その日後は何事もなかったかのように過ごした。

火曜日

僕は昨日起った奇妙な出来事のことなどすっかり忘れてしまっていた。ところがまた学校の帰り道、昨日と同じ場所で、気が付くと今度は辺りが真っ白になっていた。そして、次の瞬間にはもとどおり平和な日常に戻っていた。僕はただの立ちくらみかな、と半信半疑ながらも無理やり納得した。

水曜日

まただ。今度は、出かけるときに辺りが真っ暗になり僕はまるで宇宙にいるようだった。10秒ほども続いただろうか、そのあと僕は元いたところに立っていた。僕は体調が悪いのだろうと思ってその日は学校を休むことにし、家に帰り、一日中寝ていた。

木曜日

今日も学校を休むことにした。僕は月曜から起っている変なことについて考えた。僕は何だかだれかからじっとみられている気がした。僕は振り返ったが、そこには僕の部屋の白い壁があるだけだった。

金曜日

僕はなぜか孤独感を感じていた。僕の親は共働きでめったに家にはいない。兄弟もいないし友達もいない。でも今まで孤独を感じたことなどなかった。他の人間はどういうことを考えているのだろう。他の人間はどのように見て、どのように感じるのだろう。そもそも、他の人間なんて存在するのか。また誰かに見られてる気がした。外からは子供たちの遊ぶ声がして、閉じたカーテンのすきまからは、日の光が差し込んでいる。僕はまた後ろを振り返ってみた。今度は昨日よりだいぶ速くだ。そしたら一瞬そこには壁がないような気がした。だが、次の瞬間またいつも通り白い壁があった。もう僕には分かっている。あの外から聞こえる声も、差し込む日の光も、全部僕にそれを気づかせないようにするためなんだ。でも僕は確かめるのが怖かった。その日はそのまま寝た。

土曜日

昨日からごはんを食べていない。全然腹が減らない。いや、本当は減っているのかも知れないがそれに気づかないでいるだけなのかも知れない。そもそも腹が減るってというのは、どういう感覚だったのだろうか。それさえも分からない。昨日何か重要なことに気づいたような気がしたのだが、何だったのだろうか。その部分の記憶だけきれいになくなっていて、どうでもいいことだけ思い出せる。でも、もうそんなことはどうでもいいや。僕は、今日も一日中寝ていた。

日曜日

今日は朝から目がかすむ。体が思うように動かない。ごはんをずっと食べていないからか。でもごはんってどうやって食べるんだっけ。いつもは簡単に食べられたのに。あれっ、そういえば体ってどうやって動かすんだっけ。そう思うと全然体が動かなくなっている。もうわけがわからなくなった。あれっ、息ってどうやってするんだっけ。そう考えた後にそれは考えてはならなかったと思った。でも、もう遅かった。僕は息できなくなっていた。苦しくなってきた何とかしようとする、何とか首が動いた。振り向くとそこにはあるはずの壁がない。ただ暗闇が広がっていた。もう一度前を見ると僕の部屋が消えている。僕の周り 360 度真っ暗闇になっていた。

月曜日、わたしはいつもどおり妻に玄関まで送られて、高校生の息子と一緒に家を出、勤め先に向かった。新宿駅で乗り換える。相変わらず駅構内を急ぐ人の数が多い。ひとの動きはまるで川の流れのようだ。反対方向に進む一群の人びとは一列になって突き刺さるように流れを分けていく。それが途絶えるとふたたび流線は合わさる。息子はいつものように「行って来ます」と言って別のプラットホームに行く。勤め先に着いて、まずメールを読む。これが習慣だ。

火曜日、朝、電車の中でもみくちやになりながらも、前に見たことのある乗客がいることに気づく。後ろの人の握りこぶしが背中に当たって痛い。耐えられなくなって、肘で後ろに合図する。新宿駅で下りると、後ろにいたと思われる若い男が睨む。同じ方向に行くではないか。知らん顔していたが怖かった。ストレスをわたしに向けて発散しないで欲しい。勤め先では最近得た「宇宙空間掩蔽」なるアイデアが実行可能かどうか調べるために簡単な計算を始めている。計算力が落ちたので結果を確認するために、昨日途中まで使い古しの紙でやっていた計算を初めからやり直す。

水曜日、新宿からはいつものように中央線の最後部の車両に乗る。遠くの学校へ通う子ども達が途中の駅で次々と乗り込んで来て、昨日と似たような会話を交わしている。武蔵境駅前のバス停で並んでいると、昨日わたしの直前にいたひとが、後から来て当然のようにわたしの前に入り、会釈する。ルール違反だよ。でもまあいいか。勤め先では昨日と同じ計算を始める。何度やっても結果に不安が残る。

木曜日、息子とともに6時47分発の電車の後ろから3両目、車両の一番後ろのドアから乗り込む。今日も背中にこぶしが当たる。なんてことだ。同じ男が後ろにいるらしい。昨日は少し離れた場所にいたようだが。また新宿で睨まれてしまった。先週までは木曜日に共同研究者のY氏が議論のために来ていたような気がするが、定かでない。そうであったとしても、彼も自分の研究室で昨日までの仕事に追われているに違いない。

金曜日、電車の中で同じ顔ぶれを見て安心する。背中の痛いのも同じだ。新宿での下りる順序もほぼ一緒だ。バス待ちの列はいまや同じ顔ぶれ同じ順番になった。いつも12時半にコーヒーを飲み来るK氏が12時20分に現れる。なぜか怒りが湧いてくる。12時半でなくてはいけないんだ。彼もなんとなく落ち着かないようすで、出直してくる。午後、昨日までやっていた計算を始める。だが、新しい計算用紙を使うのはいけないような気がする。結局、昨日

使っていた計算用紙の計算式をボールペンでなぞりながら昨日と同じところまでいった。

土曜日、今日も出かけなくては。息子も起きて来る。妻はすでに同じ朝食を用意している。同じ物を買って来るようだ。冷蔵庫の中身も同じ配置にしてある。わたしの身体は油切れのようになって動きが緩慢になる。駅に行くと、昨日と同じようにホームには続々と人が集まってくる。2、3人が転ぶのを見た。足元に気をつけてくださいよ。電車が来る。われわれが同じ車両の同じドアから入ると、ほっとしたような声が近くから聞こえる。勤め先では、昨日と同じメールが来ていたので同じ返事を出す。夜、家に帰ってテレビを見ると、アナウンサーが昨日とまったく同じニュースを伝えている。それでいいのだ。

日曜日、朝起きると節々が凝っている。首を動かすのも辛い。ほぼ自動的に朝食を流し込み、息子と一列縦隊で駅に向かう。電車の中では、乗客の配置が昨日と同じになるように狭い中で微妙な調整が行なわれる。武蔵境の駅でいつものように階段を下りるつもりであった。だが、つまづいてしまった。ふわっと浮いて背中から落ちた。痛っ。階段には14段毎に踊り場があって、幸い下までは落ちず最初の踊り場で止まった。良かった。衝撃は背中の中のバッグが受けてくれた。骨は折れていないようだ。

だがもうダメだ。昨日と違うことをやってしまった。立ち上がる気力が無い。近くを通るひとは非難に満ちた表情でわたしを見る。下から登ってくる通勤客がわたしを踏み越えていく。わたしは痛みをこらえ、あお向けのまま目をつむった。

月曜. 月が、日焼けで大火傷
火曜. 火傷を、水で冷やし
水曜. 残った水で、木をそだて
木曜. 木を切りにきた金太郎
金曜. 金太郎、土砂崩れの下になり
土曜. 日差しで、土は干乾びて
日曜. お日様、月見団子をほうばった。

月見団子、最期の7日間

月曜日

今日は二限目に授業があるので午前9時30分に家を出た。特におもしろくもない授業を終え、友達の森山と一緒にランチを食べた。森山は明日から一週間旅行に行くらしい。うらやましい。

火曜日

今日は別に授業はないが、卒論研究のために大学にきた。2階の研究室から下を眺めていると、森山に似ている人物を発見した。「あれっ」と思ったが、夜に森山が旅行先から電話してきた。やはり、見間違いだった。

水曜日

今日は一日中家にいた。セールスの電話がかかってきた。その人は「森山」という名前だった。

木曜日

今日は1限目から4限目まで授業だった。帰りの途中で森山とすれ違った。間違いはない。あれは森山だった。もう旅行先から帰ってきたのかな？森山に電話してもつながらなかった。

金曜日

今日は友達の富光と小倉へ行く約束だった。待ち合わせの場所にやってきたのは森山だった。「富光は？」と聞くと「なにいてんの誰？それ？」という。富光に電話すると森山の携帯がなった。周りを見ると10人中1人は森山にそっくりなやつがいる。わけがわからないから帰って寝た。

土曜日

いつも土曜の午後1時に彼女がくることになっている。「ピンポン」となったのでドアを開けると森山がいた。「何か用」と聞く「はっ？なにいてんの？それより今日は映画にいこうよ。」といってくる。なにいてんだこいつと思いながら彼女に電話すると森山携帯がなった。頭が狂いそうだ。とりあえず逃げるように車に乗り、町を走った。歩いている人がみんな森山だった。いつのまにか車で寝ていた。

日曜日

もうどうなっているのかわからない。誰かに助けて欲しい。「そうだ親に電話しよう。」さっそく実家に電話した。「はい、森山です。」すぐに電話を切った。頭が真っ白になった。とりあえず落ち着こうと思い、バックミラーで自分を見た。自分の顔が森山になっていた。

火曜日

僕はいつものように午前7時に起き、8時30分に学校に行く。1限から5限まで授業を受け、放課後には卒業研究をし、午後9時に家に帰り着く。それから夕食を食べ、寝る。何の変哲もない1日だった。唯一違うところと言えば、黒いスーツを着た人をやたらと見かけたというくらいだ。

水曜日

今日もいつものように午前7時に起き、8時半に学校に行く。1限から5限まで授業を受け、放課後に卒業研究をし、午後9時に家に帰り着く。それから夕食を食べ、寝る。毎日毎日同じことの繰り返しにうんざりだ。今日も黒いスーツを着た人をやたらと見かけた。昨日よりも増えている気がする。

木曜日

今日もいつもどおりの生活する

しかしそれにしても黒いスーツの人が多し。すれちがう人の半分は黒いスーツを着ている。黒いスーツの「彼ら」じゃ何者なのだろうか。「彼ら」は若いのか、老いているのか、男であるのか、女であるのかさえわからない。若いようでもあり、老いているようでもある。男のようでもあり、女のようでもある。ただひとつわかったのは、「彼ら」は皆同じ顔であるということである。

金曜日

今日もいつもどおりの生活する

黒いスーツの「彼ら」は着実に増えている。いや、「彼ら」でない人が減っているのかもしれない。黒いスーツの「彼ら」は僕と同じように、毎日同じことを繰り返しているのではないかと、ふと思った。

土曜日

土曜日は学校は休みだが、いつもの習慣で7時に起きてしまった。外に出かけてみた。黒いスーツの「彼ら」は、ますます増えている。というか、「彼ら」でない人は、数人しかいない。「彼ら」は土曜だというのに、いつものように学校や会社に出かけているようだ。やはり「彼ら」は、毎日同じサイクルで、同じことを繰り返しているようだ。

日曜日

今日は日曜日なのに、なぜか学校へ行かなくてはいけない気がした。日曜日だから授業などないはずなのに、1限から5限まで授業があった。出会う人は、

すべて「彼ら」であった。通学中の電車で見かける人も、授業を受けている生徒も、そして先生さえも。

きっと、僕ももう「彼ら」になっているのだろう。

月曜日

世界中の人が「彼ら」になっていた。

「彼ら」は、毎日同じサイクルで、同じことを繰り返す。これからは毎日同じ日がやってくるだろう。

月曜日 今日朝起きたらすでに10時を回ってた。おそらく昨日のアメフトの試合で非常に疲れていたものだと思う。体が痛く、重たかった。接戦だったが負けてしまったので、とても機嫌が悪く学校へも行く気がしない。疲れているし、今夜はバイトがあるので休んでしまおうと思ってまた寝てしまった。そして、体の痛みがあるもののバイトをこなした。

火曜日 今日は普通に学校へ行き、授業もまじめに聞き、午後は図書館で友人の堀田君と実験のレポートを調べた後、部活の練習に行った。試合の疲れをとるという意味で軽く汗を流す程度だった。しかし体は疲れている。

水曜日 起きたら肩が痛い。肩がしびれていることがすぐにわかった。試合で怪我したのが今になって痛んできたのだらうと思って湿布をはってそのままにしておいた。体も疲れが取れないので今日は練習を休んで見学することにした。

木曜日 足まで痛くなった。肩の痛みも湿布だけでは効かず、何か病気ではないかと思い、整形外科へ行った。すると、医者からは何事もないような顔をして「異常なし」といわれ、痛み止めの薬と湿布をたくさんもらった。こんなに痛いのにと思って、とても腹が立った。

金曜日 やはり体は悪化していくばかりだ。脳までもが締め付けられるように痛い。ついに動けなくなってしまった。このまま死んでいくのかと思って、うなだれた。

土曜日 このまま死んでいくのはいやだと思って動けないからだの力を振り絞って病院へ行き、検査をしてもらった。しかし医者も原因不明な病気に悩み、本人の僕はもっと悩んだ。そしてそのまま入院した。

日曜日 そして僕の体は破裂した。ひとかたまりもなく…。そして僕の存在を知る人もいなくなり、そのまま時代は過ぎ去っていくのであった。

(月曜日) 連休明け。毎週のごとくこの日は、朝の弱い私にとって一つの地獄である。低血圧ぎみなのか、頭が痛い。動かない体に喝をいれて、学校へ。友達に借りていた本を返し、いつものようにバイトへ向かう。ごく普通の月曜日だった。

(火曜日) 今日もいつものように…とはいかず、早速遅刻をしてしまった。教室でとなりの席にいた男の子に話しかけられ、話しているうちにレポートを出さなければならないことが判明した。危ない危ない。こうして仲良く話しても、授業が終ると「それじゃあ」といってあっさりわかれ、教室の外に出るとすでに他人。そんなもんだ。今日はバイトがないので、そのまま家へ帰った。

(水曜日) 今日の講義はいつもと違う教官が前に立っている。講師か何かだろう。彼は普通に講義をし、学生はいつものように講義を受けている。少なくとも私にはそう見えた。だが、何か変な感じがする。その時だった。教官が「この点において…」と言った瞬間、突然学生達が大声で爆笑しはじめたのだ。教官まで笑っている。何がおかしいのだろう。全く分からない。そのままその日は授業にならず、ただ時間が過ぎるのを待って、教室を出た。よく分からないが変な一日だった。

(木曜日) しまった、忘れていた。今日はレポートの提出日だ。幸いなことに締め切りの時間は午後5時までだから、午前中は授業はないが課題をするために学校へ行こう。しかしよく考えてみると、課題が何だったか分からない。友達に聞こう…と思ったが、唯一一緒に受けている奴が携帯電話を持っていないので連絡のとりようがない。まずいな…。と、その時、携帯電話が鳴った。知らない番号だ。出てみると、授業中に話した彼だった。親切にも内容のみならず、提出場所まで教えてくれた。私は普通に「ありがとう。じゃあね。」といって電話を切った。「ああ、助かった」という安心感もつかの間、一つの疑問が湧いて出てきた。なぜ彼は私の電話番号を知っていたのか。名前すら知らない仲だったのに。事実、私は彼の顔すら満足に覚えていない。ハッと気付いてもう一度携帯電話の着信履歴を見てみた。「アオヤマクン」。だれだ？青山君って。確かにさっきは名前が出ていなかったはずなのに。しかし、勘違いということもあると思い直してレポートに取りかかった。やっとの思いで仕上げ、そのままバイトへ向かった。

(金曜日) 昨日までの変な日に比べ、今日はごく平凡な日だ。バイトもないし、友達と遊びにでもいこうか。週末ということもあり、浮き足立った気持ちでめぼしい友達に電話をかける。一人目は話し中だ。二人目にかけた。圏外。三人

目。「お客さまのおかけになった電話番号は、現在使われておりません」。四人目、五人目……。つかまらない。しょうがないので、昨日の青山君に電話をかけてみる。彼は快く話にのってくれた。二人では寂しいと、友達を何人か呼んでくれるという。これで、週末は楽しく過ごせそう。私は今までの不安も疑問も忘れ、胸を踊らせていた。待ち合わせの時間。そこには7～8人集まっていたが、知った顔がない。きっと遅れてくるのだろう。と思ったその時、その中の一人が「やあ、待ってたよ」と声をかけてきた。誰？この人。そう思ったのが顔に出ていたのだろう、彼はこう言った。「青山だよ。青山！」。ふいに背骨に緊張感が走った。知らない。私はこの人を知らない。いくら覚えとはいえ、背格好くらいは覚えている。彼はこんなに背が高くない。そんな時にもう一人が「おまえさー、さっき電話かけてただろ？ごめんごめん、気付かなかったよ。」と、笑いながら言った。かけた覚えはない。次々と、回りの人もあたかも友達であるかのように話し掛けてくる。私は彼等を知らないのだ。何がなんだかよくわからなくなってきた。そのまま流れに任せて、夜どうし街中を放浪した。

(土曜日) 早朝。始発電車に乗って家へ帰ってきた。カギを開け、ドアを開いた私は、思わず部屋番を確認した。チェーンがかかっているのだ。中に人の気配を感じた時、このうえない恐怖感を覚えた。「遅いよ、お姉ちゃん」。…私に妹はいない。自称妹と言うこの人物を私は知らない。が、こういうことにも慣れてきた。しょうがなく部屋へ入った。テレビがついている。ニュースだ。その瞬間に私の恐れていたことが。彼女はニュースを見て爆笑しているのだ。もう嫌だ!! 忘れてしまおうと、そのまま布団に潜り込んで眠った。

(日曜日) 何時間眠ったのだろうか。少し明るい時間だった。そこには妹という女性もいない。ああ、夢だったのかと安心した。安心したついでに友達に電話をかけてみよう、携帯電話の電話帳を開く。そこには知らない名前がずらりと並んでいる。頭の中が白くなった……。そういえば、私って、誰だっけ？

月曜日。今日からまたいつもの1週間が始まると思いながら1限目に間に合うように7時半に家を出て学校に向かった。いつものことで道は渋滞していたが何とか間にあうことができた。講義を3つ受け、夕方には家に帰った。いつもと変わらない一日だった。

火曜日。今日もまた7時半に家を出たが道は渋滞していなく10分も早く学校に着いた。学校にいる人の人数もいくぶんいつもより少ないような気がした。いつものように講義を受け、午後7時には家に着いたが、夏だというのに着いたところには外は真っ暗だった。少し変だと思いながらも寝るころにはそのことは忘れていた。

水曜日。今日も同じように家を出たが、20分も早く学校に着いた。車の量が今日は休みだと思うぐらい少なかった。今日は2つの講義を受ける予定だったが、2つ目が休講となり、昼前に家に帰ってきた。深夜のバイトがあるため昼食を食べた後少し寝ることにした。何時の間にか夜になっており夜11時から翌朝8時までのコンビニのバイトへ行った。

木曜日。朝9時ごろバイトから家に帰ってきた。今日は学校も休みなので寝ることにした。午後6時ごろに目が覚めたが、外は真っ暗になっていた。これはおかしいと思い、このころから世の中の変化に気づき始めた。

金曜日。世の中がおかしいと思いながらも学校へ向かった。今日は車を数えるほどしか見らず、今まで最高の早さで学校に着いた。学校にも数えるほどの人しかいなかった。他の人は世の中の変化で学校どころではないと考えているのだろう。自分も来なければよかったと思った。今日も日が暮れるのが早くなっていた。それに気温も低くなり夏なのに長袖を着るようになっていた。

土曜日。朝10時くらいに起きたが、まだ薄暗かった。そして長袖でも寒いくらいの気温になっていた。一日で日が当たったのは4時間くらいだった。これは日本だけでなく他の国も同じようだった。

日曜日。今日は朝からずっと真っ暗。電気も使えなく何も見えない日となった。太陽が消えてしまったのだ。気温も氷点下となり、生物が全滅し世界は破壊されたのであった。

月曜日 いつもどおりの朝をむかえた。目覚めのコーヒーを口にふくみ、新聞に目をとおしていた。しかしながらやけにかわった薬の広告が多いのが目につく。ムダ毛が脱毛することなく処理できる薬品だの、脂肪をへらすためのスリム効果筋肉増強剤だのであった。その日はとくに不思議に思うわけでもなく何気に一日がすぎた。

火曜日 今日もいつもどおりの朝だった。テレビをつけて見ていると変なニュースがおおい 女性のすもう力士誕生！ だの ニューハーフがミス日本に選ばれる などが報じられていた。男が女よりも美しく、女が男よりも美しい時代というのか、そんなニュースを見ながら一人苦笑していた。

水曜日 いつもどおりに朝おきたがコーヒーがきれていたのでも買いに行くことにした。私はびっくりした。そのコーヒー缶に 飲みすぎると危険！ 本当に眠れなくなります と表示されていた。他の商品にも注意書きがおおい。普通の食品にも薬が服用されているというのか。なんだか怖くなってきて家にかえりその日は昏睡した。

木曜日 普段どおりにおきたが街は異様に静けさを感じた。とりあえず街にでてみようと思い歩いた。なぜか人の視線が気になる それはなぜかわからなかった。しかし私は気付いてみてあっけにとられた。女が黒くたくましく、男が白くひよわいと感じた。これが流行なのだろうか。ギャルやフェミ男といった現代のスタイルにあてはめようともいきすぎている。自分一人がついていないのか自問自答していた。夢だと信じたく帰りまた眠りについた。

金曜日 ほとんど眠れず友達の家に行った。親友の佐々木君の家に行った。佐々木君は不治の病に犯されていた。髪はぬげ色白でやせ細っていた。この時 環境のせいでホルモンが犯されているのだという事に気付いた。次は自分がそうなるのか不安で震えてきた。もう手遅れなのか。何を信じていいかわからなく途方にくれるしかなかった。

土曜日 結局この日も眠れなかった。そして全てが怖く食事もこの三日間とっていないみんながおかしい。もう男も女もない。どうすればいいのか。外にもでたくない。このままでは死んでしまう。一人とり残されるぐらいならみんなと同じ方がいいと考えひたすら食事をとった。そしていつの間にか眠ってしまった。

日曜日 私は目覚めた。しかし鏡で自分をみても何も変わっていなかった。なぜ自分だけが 私は狂ったように食べた。そしてしばらく気を失った。ふと目

を覚ますと自分の姿は変わり果てていた。どうやらいきすぎて退化してしまった。もう形もなかった。そして自分の存在を失った。

月曜日。

何気なく始まった一週間。
戦いの一週間が、また始まった。
絶対追いついてやる！

火曜日。

今日こそ追いついてやる！
ボクはテレビをちらりと垣間見た。
野球中継が放送されていた。
知らない人がたくさん応援している映像が流れていた。
知らない人の顔を思い浮かべることは難しい。
こんな細かいところまで…。
なかなかやるな。

水曜日。

朝がきた。
ベッドの中で何気なく目を開ける。
しまった！
そう思ったときにはもう遅い。
そうして、また、一日が始まった。

木曜日。

ぶるるる…ぶるるる…
電話のベルが鳴った。
すばやく駆け寄り、電話に出る。
「もしもし…」
相手は学校の友達だった。
何気ない、くだらない話を繰り返し、話を終え、切ろうとした。
!!
がすっともう一度受話器を持ち上げ、叫んだ。
「もしもし…！」
「なんだよ～、でかい声出して」
友達は怒っていた。
また、追いつけなかった。

金曜日。

学校へ向かう。

満員電車に乗る。

正面を向いていても、背後に誰かの存在が感じられる。

振り向くと、そこには見知らぬ誰かが人に押しつぶされていた。

右を見ても、人がいる。

左を見ても、人がいる。

そして、存在も感じられる。

追いつくことは無理なのか？

土曜日。

今日、学校は休みだ。

一日中ごろごろしていよう。

部屋で何かをしながらも、ちらりちらちと辺りを見回す。

いつもと変わらない、自分の部屋が広がっている。

不意に振り向いてもみる。

しかし、いつもと変わらない、自分の部屋が広がっている。

日曜日。

また一週間が終わってしまう。

どうして追いつけないんだ。

絶対に追いついて、いや、先回りしてやる！

!!

いいことを思いついたぞ！

そうだ、こうすればきっと追いつける！

我ながら名案だ！

そして、実行してみ……

今日は朝から良い天気、まさにテニス日和。食事の後片付けも早々と終わり、洗濯物も外に干し、気分は爽快。大学生の息子は親の影響か今朝も早くから出かけ、テニス同好会のコートとり。夫は日曜に仕事場に泊まるといったきり何も連絡して来ない仕事人間。壁を通して姑の咳ばらいが聞こえる。毎日毎日ごろごろしているだけではと、十年休んでいたソフトテニスを始めたところ。所属クラブの練習は月曜と木曜の週二回。隣に多少は気を使いながら楽しんでいる。テニスコートへは自転車で5、6分。テニスの腕は数度の練習で以前の調子に戻っている。上達は望めないが、白髪が隠せなくなった同じ年頃の主婦5、6人でのゲームに笑いもこぼれる。汗を流せばいやな事も忘れ、毎日の家事も続けられるというものだ。

コートに11時に着くと、何時もはまだメンバーは誰も来ていないはずなのに15人程でゲームを始めているではないか。金網の外から見ると若い女性もいる、そのうえコーチらしき男性もいる。何時も遅刻しない私が断りも無く遅刻するのはおかしいと皆が駆け寄ってきた。よくよく皆の顔を見ると岩手にいた時のメンバーだ。ゲームを2時間楽しんでお昼をコートの近くの中華屋ですませ、自転車を走らせているとランドセルを背負った小学1年生の息子にであった。

今週末に盛岡でテニスのクラブ対抗試合があるので、火曜日の今日も練習に朝から頑張っておかけた。家に帰ると下宿のおばさんのごはんがまっていた。今日はいつもとは違ってとても美味しい。

大学へはいつもはスクールバスでいくのだが、いつまで待ってもバスがこない。電車が来て乗ると学校のまえで全員降ろされた。教室の中には女子しかないはずなのに、男子もいるではないか。校庭に出てみると道の向こうには長良川が流れている。そうだ今日は高校卒業アルバムにのせるというので、場所を長良川の河原にしたのだ。そうだ今日は水曜日だったのだ。

いつものように吉永小百合の朝のラジオドラマを8時15分まで聴いてでかけると、私の前を中学の先生たちが列をなして歩いている。これで今日も滑り込みセーフと思いきや皆はランドセルを背負ってかえりの挨拶をしている。台風が近づいているので、今日は高学年のお兄さんお姉さんと一緒に下校するということだ。そういえば担任の先生は小一の時の浅野先生だった。今日木曜日は写生大会だったのに残念だった。家に帰ると両親と姉たちが食事を待っていた。夜9時頃には皆寝てしまった。

金曜日の朝起るといつものようにお腹が痛くなったががまんして学校に行く

と、講堂でお遊戯会をしているではありませんか。幼稚園の先生が私をいまか
いまかと待っていたらしい。一年の半分ほどしかいかない私なのに。練習も少
ししかしていないのに、皆の手を引いて踊る姿を見て母は、感激しているの
です。家に帰ると周りにはいっぱい雪が積もっており、家の中では、母がス
トーブに石炭をくべています。ストーブの火を見ているといつのまにか眠っ
ていまゆうぎかいです。

今日は朝から近所のお友達と遊びました。土曜日なのに姉と兄はまだ小学校
から帰ってきません。きっと姉はずらんでもとりながら道草をしているので
しょう。空を見上げるとトンビがとんでいました。

日曜日に父に連れられ父の仕事場に遊びに行きました。まだ小さいが一人
で家に帰られる距離なので仕事する父と別れ、家までの一本道を帰りました。
知っているはずの道が周りには白樺の木も無く、どんどん細く何か暗い道にな
り、温かな湖のような所に行き着いてしまった。大きな声をだしましたが返事
は無く、ドクドクという音が聞こえ、遠くでいて近くのようなそんな所で母の
声がする。私の体は丸く小さく暗い中、その母の声もいつのまにか聞こえなく
なり、静寂の中にいくつものいくつもの息遣いだけがする。

ワアアア――――。

死にたくなった地球

月曜日

地球 ... お月さん、長いつきあいだから力を貸してよ!

月 気持はわかるけど、申し訳ない。兎さんのついたお餅で花まつりをするため時間がない。

火曜日

地球 ... 小惑星さんよ、力を貸してよ!

小惑星 一人では無理なので皆に連絡しようと思うけど、宇宙線による電波障害で電話が通じない。

水曜日

地球 ... 木星よ、兄貴の地球の言うことを聞いて、望みをかなえてくれ!

木星 ... 兄貴の言う通りにしたいのは山々なれど、子供(衛星)に人間が送り込んだ宇宙船とかいうハエを追い払うのに忙しい。

木曜日

地球 ... 親父さん、力を貸してくれ!

太陽 ... お前もいい年なのだから自分のことは自分で処理しろ。

金曜日

地球 ... ハレー彗星よ、お願い頼むよ!

ハレー ... お前の所へは最近行ったばかりだから、次に寄るとしてもかなり先のことになるよ。

土曜日

地球 ... 射手座よ、その弓で心臓を貫いてくれ!

射手座 ... 年のせいか、老眼で正確に当てる自信がない。

日曜日

地球 ... 創造主よ、あなたであればできるでしょ、お願い助けてください!

創造主 ... 宇宙という麦を粉にして、イースト菌を加えビッグパン(人間は耳が悪いのでビッグパンという)を作っている最中に小さな粉が何を言っているのか?

という言葉が終るか終らないうちに、宇宙怪獣が創造主の作った餌のビッグパンをあっという間に一呑みにしてしまいました。

Day 1: To the **INDOLENT** people:

” I address you first of all, you, who believe that you are innocent, you indolent people.

A heavy burden you tie upon yourselves, heavier than serious crimes and heavier than the Earth is able to bear.

Guilty you are for all the evil you did not prevent!

Guilty you are for all the good you did not do!

A heavy burden! Because of you the world will end. ” (Karin Boye)

Day 2: The indolent people look on,

while the **ARROGANT** people,

conquer countries all over the world and kill the natives or enslave them;

claiming to be the master race, exterminate peoples of different races;

ignore treaties that are made to save the world from contamination,

environmental destruction, lack of energy sources, wars, etc.

Day 3: The indolent people look on,

while the **GREEDY** people

exterminate millions of natives in search of gold and silver; make wars

in search of oil or in order to protect their interests; destroy small industries

by merging them with big companies in the name of profitability;

transfer industries to parts of the world, where they need not pay high

wages, (a modern form of slavery) and thus earn more money, ignore

laws of Nature, e.g. feed domestic animals cheapest possible food that

is fatal to the animals' health, as well as to the human beings' health,

etc., etc.

Day 4: The indolent people look on,

while the **ENVIOUS** people,

the brothers of the Greedy people, fight each other in competition.

Nestle boss Helmut Maucher says: ” ... The important thing to do in

order to survive in these times, no matter whether it concerns an individual,

a company or a nation, is to be more competitive than your

neighbour. ”

Day 5: The indolent people look on,

while the **VOLUPTIOUS** people,

in their hunt for sensual pleasures, take drugs, become alcoholics, abuse women and children sexually, use pornography, etc., etc.

Day 6: The indolent people look on,
while the **GLUTTONOUS** people
eat the food, which they should share with the starving people all over
the world.

Day 7: The indolent people look on,
until the **WRATHFUL** people,
committing massacres, throwing bombs and conducting airplanes into
buildings, also kill them.

The Gender Switch

One day, Henry, Mr. Determiner's 29-years-old son, entered his father's room and said:

"Dad, I'm going to become a woman."

Absent-minded, absorbed in correcting grammatical tests, Mr. Determiner asked:

"When?"

"The operation is next Tuesday."

Now Mr. Determiner spun round and stared aghast at his son, speechless. While Henry was leafing through a book, his father tried to choke the turmoil which the shocking news had caused in him. There was no other sound to be heard than the ticking of the old pendulum clock. After a long while, Mr. Determiner, who had learnt not to interfere with his son's decisions, asked:

"What are we going to call you?"

"Henrietta."

"Hm, hm. Did you tell your mother?"

"Yes."

"And what did she say?"

"At least she wasn't concerned with names."

And he left his father.

It took a long while until Mr. Determiner grasped the scope of this tremendous occurrence. After a long life filled with more frustrations and disorder than joys he had found comfort in grammar. As long as he could replace the phenomena of this cosmos by the pronouns "he", "she", and "it", he was happy. Now even this order was upset, and by nobody less than his own son, who, in a few days, would be his daughter! How would he be talking about his son's, excuse me, his daughter's childhood and youth? 'When she was a school boy ...' What a mess! Mr. Determiner sighed.

After Henry had undergone the operation, which had been successful, Mr. Determiner had to go to the registration office in order to change his family's personal data. The officer took a form and asked:

"Name?"

"Theophilus Determiner"

"Born?"

"29th February 1930, in Moffat."

"Profession?"

"Teacher."

"Married? What's your wife's name?"

"Mathilda."

"And her maiden name?"

"Subordinate."

"Strange names," murmured the officer. "Any children?"

"Yes, Henry, born 13th June 1959."

"Son Henry, born 13th June 1959," the officer repeated.

"He doesn't exist anymore," said Mr. Determiner, "since 17th August this year."

"Oh, I'm sorry to hear that..." The officer looked at Mr. Determiner, whose clothes didn't show any sign of mourning.

"But I have got a daughter. Her name is Henrietta."

The officer looked up from the form. There was something strange about that man, he thought.

"When was she born?"

"She wasn't born at all!"

??? The officer stared at Mr. Determiner with his mouth open. Then he said:

"Now, Mr. Determiner, I don't understand this: you have got a daughter who wasn't born at all..."

"I have to correct myself: She was 29 years old, when she ... when she was born, I mean, when she came into being, the 17th August."

"Excuse me??"

"Grammatically speaking", Mr. Determiner smiled awkwardly.

"Grammatically speaking?"

The officer was a bright man. He looked at the form, and now something dawned upon him.

"Mr. Determiner, you mean Henry switched gender and became a woman called Henrietta?"

"Yes", Mr. Determiner said with relief.

The officer continued to write.

"Was that all?"

"Yes, that was all," Mr. Determiner said. He left the registration office burdened by the problem that a human being having switched gender was without past ? grammatically speaking.

Only grammatically speaking?